

研究課題	「人」をテーマとした地域情報発信により自己を見つめ、人間力を高める
副題	～伊豆大島に暮らす「人」と「自分の思い」をテーマに、魅力が伝わるドキュメンタリー映像を制作する～
キーワード	ドキュメンタリー映像、メディアリテラシー
学校/団体名	公立東京都立大島高等学校
所在地	〒100-0101 東京都大島町元町八重の水1 2 7
ホームページ	https://www.metro.ed.jp/oshima-h

1. 研究の背景

本校は全9学級、全校生徒112名、普通科と併合科（農林・家政）を併設する東京都の離島、伊豆大島の都立高校である。敷地面積は東京ドーム3.5個分にわたり、豊かな自然に恵まれた環境である。地域住民のほとんどは地元大島の出身で、生徒は地域における活躍が期待されている。しかし、生徒の郷土への思いは希薄で、進路活動では自己PRに苦慮している。そこで、単なる地域紹介の観光映像制作ではなく、「人」に焦点をあて、「伊豆大島に暮らす『人』と対象者に対する『自分の思い』をテーマにドキュメンタリー映像を制作、発信することにより、郷土を見つめ、自己を見つめ、人間力を高める」ことをテーマとした。

生徒の99%が卒業後は島外に進学、就職することから、この映像制作を通して、自信をもって郷土を旅立つ力を身につけてほしいと考えた。また、離島のため、立地面、費用面などにおいて、外部との交流や社会で活躍する人々と関わる経験が乏しい。映画監督で、映像制作を通じた教育実践の実績をもつ山崎達壘氏を招聘し、映像制作の技法に加えて、映像のプロとの交流を通じて、社会の一員として活躍する意識を芽生えさせることを目標にした。

2. 研究の目的

【教育活動的側面からの意図・目的】

- (1) 生まれ育った郷土（東京の離島、伊豆大島）に暮らす人々の人間力と自分自身の思いを表現した映像作品を制作することにより、**郷土を敬愛し、地域に貢献する態度を育成する。**
- (2) 主体的に表現する映像制作を通じて、**主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成する。**
- (3) グループでの企画、撮影、編集などの作業を通じ、**協働的に取り組む態度を育成する。**
- (4) 他者が制作した映像作品や、自分の作品に対して出された意見を批判的に解釈したり、受容したりする経験を通じ、**他者を理解し、人を尊重する態度を育成する。**
- (5) 映像制作を通して自己を見つめさせ、**自己の在り方生き方を考えることができる力を育成する。**

【研究的側面からの意図・目的】

Film Education（映像教育）の実践により、未来を生き抜くための5つの力を育てる。

- (1) グループでの企画、撮影、編集などの作業を通じ、「**協働作業**」の力を身につける。
- (2) 他者とのコミュニケーションを重ね、互いの違いを理解したうえで、相手を尊重し、ともに行動する経験を積むことで、**多様性の理解**を深める。
- (3) 映像制作のプロセスに付随して、外部とのコミュニケーションを重ね、**社会経験を積む**。
- (4) 情報の真偽を見極め、その特性を理解して使いこなす、**メディアリテラシー**を身に付ける。
- (5) クリエイティブな学びを通じて、**学び続ける楽しさ**を知る。

3. 研究の経過

	取り組み内容	備考
4月 ～ 5月	映像制作の基本を学ぶ ・自己紹介映像制作 ・撮影(主観的な撮り方、三脚・ピンマイクの使い方) ・編集技術、構成を学ぶ 教員研修 ・教員のスキルアップ	・外部講師による映像制作講習会(対面1回、オンライン4回) ・デジタル動画教材で予習復習(生徒、教員)
6月 7月	魅力が伝わるドキュメンタリー映像(伊豆大島の「人」と「自分の思い」) を制作する ・テーマ「人」の設定 ・情報の収集、取材先との交渉 ・撮影(自分の思いを映像化)	・外部講師講習会(対面1回) ・事前準備、編集前の準備に重点を置く
9月	・編集(構成を考えたから編集作業へ)	・外部講師講習会(オンライン1回) ・客観的な視点を意識する
10月	中間発表・修正 ・フィードバック 初めて見る人が内容を理解できるか その「人」に興味をもつか、会いたいと思うか、大島に行ってみたいと思うか	・Forms アンケート(生徒、教員) ・外部講師による講評(対面)
11月	発表① 学校祭(全校生徒対象) 発表② 学校祭(保護者、地域対象) ・教室にて全作品を放映 ・作品紹介ポスターの展示	・Forms アンケート(全校生徒、教員) ・外部講師による講評(対面) ・Forms アンケート(保護者、地域) ・プログラム全体の振り返り
12月 ～ 1月	卒業ムービー制作 ・地域や自分たちの魅力が詰まった卒業ムービーを作り上げる	・ドキュメンタリー映像制作で学んだ技術を生かす
3月	発表 ・卒業を祝う会にて、教員、保護者に発表	

4. 代表的な実践

●対象：高校3年生 33名

●実際の映像成果物：伊豆大島に暮らす「人」と「自分の思い」をテーマとした、魅力が伝わるドキュメンタリー映像（5分～8分）

●流れ

1. ドキュメンタリー映像制作の基本を学ぶ（4月～5月）

最近の生徒たちは、映画やテレビを観る機会が少なく、ドキュメンタリーと言われても、なかなかイメージができない。そこで、最初に、ドキュメンタリーとは何かを学んだ。YouTubeをはじめとするSNS動画コンテンツは「自分に見えている情景を、映像を観ている人に伝える」ことを目的としたものが多いが、ドキュメンタリーは「他者に見えている世界を、映像を観ている人に伝える」ことを目的とする。この違いを理解することから、映像制作が始まった。

2. 企画・構成・撮影・編集（6月～9月）

（1）企画（取材先の選定、撮影日の交渉など）

生徒自身が「この人に取材をしたい」と思う島の魅力的な人物をリストアップし、取材先を決めた。例えば、地元で有名なたい焼き屋さんの店主、ジオガイドも行う神主さん、大島に移住して飲食店を開いた方、地元で演劇活動をしている高校教師など、多様なバックグラウンドを持つ島民の皆様に快く協力いただくことができた。

撮影対象者を決めるにあたって大切にしたこと

- ・取材許可が取れるか
- ・未来のイベントがあるか
- ・大島の魅力が伝わるか
- ・楽しんで制作することができるか
- ・完成した映像を想像するとわくわくするか

（2）取材交渉

電話やメールでの取材交渉は、生徒たちの大きなハードルとなった。ほとんどの生徒たちにとって、主なコミュニケーションツールはLINEである。「電話をかけたことがない」「メールを送ったことがない」という生徒も珍しくない。そのため、事前に、教員に電話をかけたりメールを送ったりする練習を行った。中には、メールの件名に本文を全て入れて送ってしまうという失敗談もあったが、社会経験を積むためのよい学びの場となった。

（3）撮影前の構成

1つの映像作品をつくるためには、最低でも数倍、場合によっては数十倍の素材が必要になる。そのため、たくさん映像を撮っておく必要があり、何を撮るのか事



前に決めておくことが肝心である。構成のポイントは、ドキュメンタリー映像の3つの要素「アクション」「イメージ」「インタビュー」に分解して考えることだ。要素ごとに、どんな映像を撮りたいかを具体的にしておけば、撮影当日スムーズに進めることができる。

インタビューだけではなく、その人が働いている様子などの「アクション」や、お店の外観、内装、商品、ロゴなどの「イメージ」を組み合わせることで、その人の魅力を立体的に表現できる。この3つの要素を意識することで、作品の完成度は大きく変わる。

ドキュメンタリーの3つの要素

- ・アクション = 被写体に動きがあるもの
- ・イメージ = 動かない被写体。商品・情景・ロゴなどの資料的なもの
- ・インタビュー = インタビューの答え

(4) 撮影

撮影時は、いきなりインタビューを撮るのではなく、まずアクションの撮影を行う。先にアクションを撮ることで、取材対象者の仕事や人となりへの理解が深まり、より深いインタビューを引き出す助けになる。また、アクションの撮影で感じた魅力や新たな発見をもとに、追加の質問をインタビューに織り込むこともできる。夏休みを活用して追加取材を行うグループも多く、取材内容の不足に気づいたり、対象者のさらなる魅力を掘り下げたいという思いから、5回以上取材に足を運んだグループもあった。



(5) 撮影前の構成～編集

編集作業に必要な客観的視点

- ・取材対象の視点の映像 →取材対象の手元など、様々な視点から撮影
- ・多面性、他視性 →その人物の別の側面や、その人物を見ている人の視点
- ・エンディング映像 →自分たちの思いをどう表現するか
- ・観客の視点 →見る人を意識できているか、自己満足になっていないか
- ・著作権に注意

撮影した素材を整理し、編集作業の前に全体の構成を考える。編集アプリを使って作業をする前に、構成を決めることが大切になる。編集作業は、カット編集をして全体を尺に収めてから、効果を付けて加工するという順番で行った。テロップやトランジションや音楽など効果を付けることに夢中になると、「最初の1分しかできていません」という状態に陥りがちなので、まずは全体像を作ってから、細部を作り込んでいった。この手順を守ることで、完成度の高い作品に近づけることができた。

3. 中間発表・修正（10月）

中間発表は、映像制作の重要な節目である。編集に集中するあまり見落としがちな「初めて観る人が内容を理解できるか」という視点を再確認できる機会となるからだ。さらに、フィードバックをもらい改善をするというプロセスは、探究的な学びにもつながる。

特に、今回は「島の人」を「島に住む生徒」が撮影しているため、大島の日常に詳しい生徒たちにとって当たり前の情報、例えば「このお店が島のどこにあるのか」「この人はどんな人なのか」といった基本的な情報が抜け落ちているケースがあった。また、そもそも、ここはどこなのか、という伊豆大島らしい映像が抜け落ちていたことにも気づき、伊豆大島がどんなに美しい島か再認識するきっかけにもなった。

また、自分たちのグループの映像だけでなく、他のグループの映像を観ることで新たな気づきを得られる点も、中間発表の大きな意義である。インタビューをそのまま使うのではなく、大事なところを抽出して使うことでメリハリがつくこと、一人だけではなくその人に関わる他の人のインタビューを入れることで広がりが出ることなど、新しい発見があった。

初めて見る人が内容を理解できるか、その「人」に興味をもつか、会いたいと思うか、大島に行ってみたいと思うか、という視点をもって修正作業に取り組んだ。

4. 発表（学校祭：11月）

完成した作品の中から2作品を選出し、学校祭で全校生徒の前で上映した。また、全ての作品は校内で地域や保護者の方々に公開した。映像の放映だけでなく、各班の作品紹介ポスターを掲示して、QRコードを読み取れば作品を見ることができるようにした。



当日は、取材協力してくださった地域の方々も足を運んでくださり、「これ俺が出るんだよ」と知り合いに紹介する微笑ましい場面も見られた。また、「作品のクオリティが高い」「高校生がこんなことができるなんて」と驚きの声が上がった。外部の方にも見てもらうことで、単なる発表会ではなく「上映イベント」になり、生徒にとって特別な体験になった。

5. 研究の成果

(1) 映像制作の作業を通じ、協働する力を身につけることができた

映像制作は、制作過程が複雑で、作業量も処理する情報量も多く、一人で作り上げることは難しいため、明確なゴールの共有、スケジューリングと役割分担が必要となる。今回の実践では、原則3人で1グループを作り、役割分担を行い、それぞれが自分の担当する「役割」を理解し責任を持って作業に取り組む中で、自然と「協働作業」の力を身につけることができた。

(2) 他者とのコミュニケーションを重ね、多様性の理解を深めることができた

ドキュメンタリー制作では、他者にカメラを向けて話を聞く「インタビュー取材」を経験する。自分がインタビュアーとして取材を重ねる中で、取材対象の新たな魅力を発見し、その「人」への興味をもつことができた。また、グループで一つの作品を作り上げるためには双方向コミュニケーションが不可欠となり、時には衝突しながらも、作品が完成した時には大きな達成感を味わうことができた。他者とのコミュニケーションを繰り返して、互いを理解したうえで、相手を尊重し、ともに行動する経験を積むことで、多様性の理解を深めることができた。

(3) 外部とのコミュニケーションを重ね、社会経験を積むことができた

取材対象者への撮影依頼や取材許可、上映承諾書の依頼、お礼状の作成など、外部との交渉もすべて自分たちで行った。LINEなどのSNSが日常のコミュニケーション手段である高校生にとって、電話のかけ方、メールの送り方、ビジネス文書作成、切手を貼って手紙を送る、など、すべてが初めての経験となり、その一つひとつを行うことによって、実社会とのつながりを身をもって体験することができた。

(4) メディアリテラシーを身につけることができた

「ドキュメンタリーはどこまでが真実か？」という問いに、はじめは何を問われているかわからなかった生徒たちであったが、自分たちの手で映像を制作し発信する立場を体験することで、映像とは制作者の意図をもって作られたものであり、真実を100%伝えるものではない、という事実気づくことができた。世の中に氾濫する情報の真偽を見極め、その特性を理解して使いこなす力、メディアリテラシーを実感をもって身につける良い機会となった。

(5) 生徒の進路実現につながった

ドキュメンタリーの取材を通して、伊豆大島に暮らす「人」の生き方を知ったことをきっかけに、自分たちがこれからどう生きたいか考え、それを映像の最後で表現することに挑戦した。そのことが、生徒自身が自己のあり方や生き方を考えるよいきっかけとなり、進路活動では、総合型選抜や推薦入試で「自分の思い」を自信をもって伝えることとなり、高い合格率につながった。

6. 今後の課題・展望

本研究は、映画監督で、映像制作を通じた教育実践の実績をもつ山崎達璽監督のご指導、ご助言がなければ実施できなかつたと言っても過言ではない。プロに学ぶことの意義を身をもって感じることができた。しかし、公立学校において外部講師を依頼することには金銭面での大きな壁がある。財団の支援がなければ、このような実践は実現できなかつた。来年度、教員だけでこの内容を継続できるかといえば、そこまでのスキルを身につけることは非常に困難である。今後も実践を継続していくためには、継続的に支援をしていただけるような環境づくりが不可欠であると考えている。

7. おわりに

ドキュメンタリー映像制作を通じて、生徒たちは、島の魅力を掘り下げ、人とのつながりを深めると同時に、自分自身を見つめ直す機会を得た。この経験を通じて、自分たちの住む島の魅力を再発見し、それを自分の言葉で伝える力を身につけることができた。この経験は、今後、島外に進学、就職した後も、自分の言葉で自分の魅力や背景を語る力として生き続けるであろう。

【生徒の感想】

- ・私は映像など作ったことがなく、初めての経験でした。その中で仲間と映像制作をする中で協力や、助け合い、仲間との協調性を自分の中で感じ、成長したと感じました。
- ・構成力や編集力、チームで話し合う中での主体性など、心身ともに成長できました。
- ・今回の活動で私は、班員とコミュニケーションをとりながら撮影や編集に取り組むことができた。今回の学びを私は今後の生活に活かしたいです。
- ・実際にご指導していただいて、自分たちが住んでいて当たり前感じていた大島を違った視点（動画作成者）で見ることで、忘れていた大島の良さや新たな気づきを見つけることができました。この経験は忘れずに将来の糧にして行きたいと思います。

8. 参考文献

- ・山崎達璽（2023）. 『動画・映像制作が創るクリエイティブな学び』. 株式会社インプレス